

モノリシックハート

ラングレン

蟻夢

蟻の夢を見た。そこいらにいる黒い小さいやつではない。お尻の長さが全長の半分以上ありそうで色は乳っぽい黄色。不吉な感じがした。それが大挙して自宅の脱衣所の壁の羽目板の裏に張り付いて運動していた。僕はその普段あまり開けないような羽目板をそっと戻しながら家人にどう伝えようかと思案している。そんな夢だ。時計をみるとまだ4時半だ。

鞆からパソコンを取り出すと電源ケーブルと一緒に階下に向かう。会社から貸与されているこのマシンは自宅の無線LANと上手く接続出来ない。今日は有給休暇を取っているがメールのチェックだけはしないとイケない。しなくてもいいのだがなんとなくそんな気が急いでこのあまり美しいとは言えない無粋なマシンを起動させた。はて蟻の夢なんてどんな意味があるのだろうか。検索すれば努力の象徴だから蟻自体はよい。しかしその蟻が不快に思えるならそれはおまえの努力が無駄になっているのだと言う。この分析がはたしてフロイト的に正しいのかわからないがいまの僕の状況をある程度正確に言い当てている様な気がしてこれはむっとさせられる。たしかに当たってはいなくもない。それが問題なのだ。気がつくやうに階段のところに彼女が立っていた。

Realdreams

I deram ants. not ants who you see around black. they are milky yellow, their tails are more than half of their total length. i felt evil. They are there in force, moving around on behind the panel board. I am putting it which I rarely opened back on the wall and wondering what to say to my wife. such a dream. shit, it is 4AM still.

I took the PC and am going downstair, having power supply cable. This machine my company lend do not connect internet well thru wireless LAN. As it is off day, I do not have to check the mail, but feel like checking it by unknown reason. start this PC. it is not beautiful machine, Panasonic. well, what is the meaning of ants anyway??? The net tells ant is symbol of your effort. but if you feel it is uncomfortable , this dream means that your effort is unreturned thing.

I do not know this information is surly Freudian. But in a sense this might be my situation. yes this sounds like my situation. That is the issue. Then I noticed she was standing at the stairs.

夜仕事

「またお仕事？」

「うん。起こしちゃったかな」

「ううん。無理しないで」

僕は旧式のAirMacベースステーションをノートブックに連結すると電源を入れた。このノート、堅牢に出来ている。まずマシンへのログイン。そして会社のネットワークにログイン。パスワードをいくつも記憶するのは難儀なのでひとつを使い回している。入社の際にセキュリティー担当から指導されたことを守っていない。

「本当はよくないとは思うんだけど」

「でも仕事が溜まっているから」

ハツエがこちらの台詞を引き取る様につぶやいた。会社の回線に接続するとメールサーバーがみるみるうちに未読のメッセージを送信してくる。130件。ここ何週間か未読数は100件前後を推移している。80以下になったことがしばらくない。そうだこんな状態は正しくない。

「なんかさあ。俺の問題かもしれない。いつもとても忙しくなってしまう。前の会社でもそうだったんだけど。自分で自分を忙しくしてるのかな」

「うん」

「何か俺の中に。。。致命的な欠陥があるのかも」

「え〜」

彼女に僕の仕事の内容を細かく説明したことは無い。誰かに説明しろと言われても彼女はおそらく答えられない。従順さと言ったらいいかものごとをできるだけあるがままに受け入れる、妻のそんなところを僕はすごく愛した。

いまの会社になって通勤時間が2時間半になってしばらくして彼女は朝の駅までの車で送ってくれるようになった。歩けば下りだが坂道を十数分。走ったりすると腹が痛くなったりするからこの送りは助かっている。6時32分の田園都市線急行に間に合わないと渋谷駅の埼京線ホームまで4分で移動しないといけない、これは相当リスクな状況になりうる。

「生産管理支援システム」なるものでまたパスワードを要求される。支援システムの名前がありながら極めて旧式のこのソフトは僕の仕事をあまり支援してくれない。世の中はSAPだERPだと流行っているが当社のシステムは十年は時流に遅れている。さあうちを出るまであと二時間。出来ることは少ない。最低限生産フォーキャストをアップロードするところまではいきたい。生産調整会議は既に三日前に終わった。早く入れないと中国の生産委託会社の生産に支障が出る。

「明日。。何時に出る？」

「いつもの時間。6時20分だね」

「うん」

「もう少し寝たら」

「うん」

階段を上がろうとした彼女が足を止めた。

「変な夢を見たの」

「え？」

「蟻がね。たくさん出てくるの」

渋谷駅そして湘南ライナー

僕は走っていた。リュウ太郎が珍しく寝小便をしたドタバタで期待していた妻の車が駄目になったので駅まで歩くことになり目標の6時32分渋谷行き急行に乗り遅れた。この場合次は43分の急行になるから渋谷到着は7時13分。まだ6時台というのにそれなりに混雑している車内で携帯電話のアラームを設定する。

7時13分から2分おきに三度鳴らす。一発目は半蔵門線渋谷駅改札を出たあたりで鳴る。小走りにJR改札に向かって階段を上るが前後を歩く通勤客の妨害でしばしば速度が鈍る。二回目のアラームは山手線ホームから埼京線のホームに向かう階段の下あたりで鳴る。もしまだ山手線ホームにたどり着いていないとこのタイミングはかなり厳しい。しかし修正は可能だ。階段を上がりきったらあとは7時17分の三回目のアラームまでひたすら走る。18分に渋谷を出る湘南ライナーは必ず律儀に7時17分を回った頃にはすでに渋谷駅に滑り込んでくるからだ。

(蟻の夢。。。)

それは奇妙な話だった。ハツエが見たと言う夢は僕が昨夜見た夢と酷似していた。不吉な色の大量の蟻が我が家を浸食している。それも見えないところでじわじわと。その話を聞いていたために生産計画のアップロードをすることができなかった。午前中になんとかしないといけない。それも設計変更会議の在る11時までには。そんなことを考えているうちに電車は渋谷駅を離れた。この電車に乗ればあとは宇都宮線の果て久喜まで乗り換え無しだ。やれやれ今日も間に合ったらしい。

連結

そもそも夢の中でなぜ僕は羽目板を外すことになったか。そもそも僕はその板をいやいやながらに外していた。隣家の黒沢に言われたからである。これは現実世界の黒沢の状況がまさに反映されているのであるが、彼がいきなり我が家のインターフォンを鳴らし、どうも最近蟻の活動が活発なのだが特にでかいやつがお宅の風呂場に逃げ込んだのだと言った。

この男、年は70歳代前半。建売り住宅のこの界限では一番の古株としてゴミ箱を修繕したり宅地道路への進入禁止コーンを頼まれもしないうち整備するなど当初は近所の便利おやじとして重宝されていたが

愛犬が急死した二年程前から挙動不審が目立ち、ゴミの出し方にいちゃもんをつけたり子供が宅地道路で遊んだりしているのを騒々しいと怒ったり、我々を含む40歳代の後発居住者と完全に対立するような

迷惑おやじとなっていた。なおこれは現実の話だ。そして蟻が逃げたと言ってきたのは夢の話だ。

そして風呂場の内部にある羽目板を意に逆らって開けたのだった。

そんなことをハツエに説明すると彼女は言った。

「それから？」

「それで終わり。思案していることで終わったんだ」

「その夢には続きがあるのよ」

「え？」

「私の夢はそこから始まるの」

「ってことは」

「夢がつながっている」

羽目板の向こう

彼女の話はこうだった。彼女は僕が蟻の密集する羽目板を密かに戻し、その場を離れた直後、そこにやって来た。ガタガタと騒がしい音がしたのを不振に思いやって来て立ち去る亭主に声をかけそびれた。

こここのところ精神状態尋常ならぬものを感じていた彼女のその原因はまさに隣家の黒沢である。自分でも心臓が時々ばくばくするのが感じられると言う、ある種パニック症候群のたぐいか。そもそも4300万円とこの界限では破格の新築住宅であったが購買したその喜びもつかぬ間、近隣に迷惑な住人が生息するというのは受け入れがたい事実認識。それでも朝のゴミ出し、回覧板のやりとりで会話せざるを得ない状況はまもあり、その度に軽度の心拍数増加、不整脈状態になる。それは最近僕にも話してくれていた。

そんな心身不安定が彼女の夢世界に何らかの影響を与えるのは極めてあり得る状況だ。その夢の中で、羽目板をじっと見つめていた彼女は、後ろからの声に飛び上がるほど驚いた。

「ありだあ。入っていたよ。お宅の壁になあ」

背後に黒沢が立っていた。

「あけて見なさい」

70代というその世代の人間のわりには上背がある。短髪野ごま塩頭は今年の夏の日焼けの影響でもなかろうがえも言われぬ黒光りである。得体の知れぬ威圧感に襲われながら彼女は羽目板を開ける。すると。。。

そこにはおびただしい数の蟻が不穏な密集を形成していた。一部のひととき大きな個体は羽音をうねらせ何らかのメッセージを集団にのみならず、この場所に凶らずも遭遇したハツエにまで送っているかの様。そして黒沢にも。

「みてみ」

黒沢はその赤銅の皺枯れた手を恐れる事もなくその群れに差し出すと左右に振った。何十匹かが落下し、その向こうに「巢」が見えた。

（何これ。。。）

怯むハツエを差し置いて黒沢はそのものを撫でている。通常ありの巢は地面にうがたれた穴から垂直方向にのびているものだ。しかしこの巢は違っていた。巢と言うよりは塚。盛り上がった個体、それは自宅の基礎の柱かと思われるがそれにむかって取り付いた蟻どもが塚の芯に向かって掘り進んだ。。。中近東あるいはアフリカの北部で見られる岩盤をくりぬいた洞穴上の住居がこれに近い。しかもその掘り穴が精緻であった。穴は無数。お互いの距離が等間隔。まさに城だ。

「へへ。。。気が狂った様に美しい巢だ。。。」

黒沢は振り向くとハツエに言った。

「気が狂ってる。あんたらの息子の様に」

妻は叫び 目を覚ましたと言う。それがハツエの夢だ。

このことのまえにあるエピソードを書いておかねばならない。